

国勢調査100年のあゆみ

我が国最初の国勢調査

1920

1



第1回国勢調査の実施は、「国勢調査ニ関スル法律」の制定から18年後、近代人口センサス第1号といわれているアメリカの1790年センサスから130年後のことです。

再建へ漏れなく正しくありのまま

1947

1



「再建へ漏れなく正しくありのまま」という当時の標語に調査への意欲がみられました。調査の結果は大都市の人口の激減を鮮明に物語っていました。

人口一億人突破

1970

1

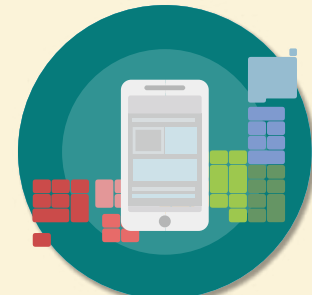


高度経済成長期のまっただなかで実施しました。ますます激化する人口移動の解明と、核家族化の進行に伴い、従来の直系世代的な家族分類を、核家族分析に便利な家族類型別集計に変更しました。

「人口減少社会」のはじまり

2015

1



調査開始以来、初めて人口が減少しました。「人口減少社会」のはじまりです。インターネット回答方式を全国で導入しました。



総務省統計局

(令和元年10月発行)



国勢調査 100 年のあゆみ

はじめに

国勢調査は、大正9年（1920年）の第1回調査以来、国の最も基本的で重要な統計調査として実施しており、令和2年（2020年）に100年の節目を迎えることとなります。この間、国勢調査は、国民の皆さまのご理解とご支援のもと、日本の国と地域の人口とその構造、世帯の実態を明らかにし、様々な統計データを社会に提供してきました。

その歴史を紐解き、国勢調査実施に至る足跡をたどると、その道のりは決して平坦ではなく、先人達のこの調査にかける意気込みや苦労がひしひしと感じられます。そして我が国で初めて行われた大正9年の第1回国勢調査は、当時、テレビやラジオもありませんでしたが、全国津々浦々まで準備が行き届き、全国一斉に、まさに国を挙げてのものとなりました。関係者の努力もさることながら、国勢調査にける当時の国民の想いが、調査遂行の大きな原動力になっていました。

それから100年の歳月が流れ、時代も大正から昭和、平成、そして令和へと変わってきましたが、国勢調査の重要性に変わりはありません。今を知り、よりよい未来をつくっていくために、国民の皆さまの理解を得て、日本国内に住む全ての人と世帯を漏れなく、正確に把握することが必要です。

この「国勢調査 100 年のあゆみ」は、国勢調査の歴史、各回の調査結果の概略とこれらにまつわる話題をまとめたものです。多くの方にご覧いただき、国勢調査への関心と理解を深めていただければ幸いです。

令和2年に実施する令和最初の国勢調査が、実り多い有意義な調査となりますよう、皆さまのご理解とご支援をお願い申し上げます。

総務省統計局

目次

第一部 <講談>国勢調査はじまり物語

- その巻 日本統計のはじまり 2
- その式 欧米諸国に於てハ前世紀ノ初以来施行スル調査ナリ 4
- その参 大正九年十月一日 国を挙げてのお祭り騒ぎ 6
- コラム 唱歌が語る、国勢調査のいろは 8
- コラム 第1回国勢調査あれこれ 10

第二部 <講談>早わかり百年のあゆみ

- その巻 国勢調査の定着と調査項目の増加～戦前から戦後復興期の国勢調査 12
- その式 都市への人口集中と高齢化の進展～昭和の高度経済成長期から平成初めまでの国勢調査 14
- その参 人口減少時代、来たる～令和の国勢調査に向けて 16
- コラム 調査票のあゆみ 18
- コラム もしも国勢調査がなかったら 20

第三部 データで見る100年

- 1. 増え続けた日本の人口も、減少時代へ突入 22
- 2. 100年前は、20人に1人でした / 3. 「宝」であることは今も昔も変わりません 24
- 4. 昭和の終わりから平成で、激変した結婚観 / 5. 第1回調査票には10名の名前を書き込みました 25
- 6. 70%を超えた第3次産業 / 7. 100年前は、100人に満たない県も 26
- 比較してみた 大正→昭和→平成 27
- 順位でくらべる 47都道府県の100年 28
- 人口のカタチ 人口ピラミッドは物語る 30
- クイズに挑戦 このグラフ、何のグラフ? 32


年表 34

講談で綴る

2020年は「国勢調査」百年の年でございます。

国の礎を知る、大切な統計、その意味と、成り立ち、百年の歴史を、講談調で綴ります。

歴史物語を軽快な調子で語り伝える講談は、テンポもよく、わかりやすい。国勢調査百年をよりわかりやすく伝えていきたいと思ひます。




第一部 国勢調査はじまり物語 えっ？ 国勢調査って何？

話は明治4年からはじまります。戸籍調べでは、スタチスチック(統計)を実現できないと主張した人物がおりました。さてさて彼が次に起こした行動は？ それこそ国勢調査のテスト調査だったのでございます。

わかまつていべにつばき
語り手: 若松亭紅椿

講談師の祖父に幼い頃から鍛えられ12歳で寄席デビュー。十八番は「八百屋お七」「白子屋お駒」。歴史好き。



第二部 早わかり百年のあゆみ

大正9年に汽笛一声、イエ全国一斉はじまりました国を挙げての大事業、国勢調査。その後も5年ごと、日本全国、全世帯隈なく調査員が訪れ、今に至ります。100年にわたる国勢調査の歴史を時代の流れにのせて駆け抜けます。

わかまつていしつばき
語り手: 若松亭白椿

紅椿の長女。1990年10月1日生まれ。本業の知識を活かした新作「スタチスチック乙女外伝」で人気急上昇中。

データで見る100年

講談に変わって、語る主役は「データ」でございます。データというと、無味乾燥な数字だと思いませんか？ いえいえ、国勢調査の人口データこそ、私たち自身や父母、祖父母ら一人一人で織り成される生きた数字なのです。



解説: 若松ツバキ

データサイエンティスト。副業、講談師。週末は若松亭白椿として高座に上がる。最近のマイブームは大正時代のキモノ収集。

本文および図版中に、現代では不適切な表現やあまり使われない表現と思われる箇所がありますが、原文および原図版を重視するため、当時の表記にのっとり掲載しています。

第一部

講談

国勢調査はじまり物語

国勢調査とは、つまりは国の情勢を知ることにあります。国勢調査百年の歴史、その成り立ち、歩み、そして今を語ることで、国勢調査とは何かを、私、講師、若松亭紅椿がご説明したいと思います。



国勢調査前史 スタチスチック 日本統計のはじまり

国勢調査のはじまり

そもそも我が国、国勢調査のはじまりは、大正9年、1920年。欧米各国と肩を並べる一等国の日本として、国勢調査の実施は国是であったのでございます。

それより約五十年前、時は明治政府ができて、間もない頃でございます。太政官正院に杉亨二という役人がおりました。

杉亨二は、肥前国長崎の生まれ。医者の子から、緒方洪庵の適塾に学び、嘉永6年(1853)に勝海舟と出会いその私塾長となります。嘉永6年といえば、マシュー・ペリー提督が黒船4隻を率いて浦賀に来航した年でございます。



東京銀座「恵美壽屋」前(銀座5-6丁目)
明治4年(1871) 写真提供: ジャパンアーカイブズ



岩倉使節団(政府首脳陣)の欧米視察
明治4年(1871) 写真提供: ジャパンアーカイブズ

安政2年(1855)勝海舟の推薦を受けまして、老中、阿部正弘の顧問となり、幕末まで幕府に仕えました。明治維新後も徳川家に仕えて、静岡藩へと参ります。ここで、静岡藩の住民に関する人口調査を試みるのですが、混乱の中、実施したものの、一部地域での調査と集計にとどまりました。

杉の能力を買っておりました明治政府は、明治4年(1871)に杉を呼んだのでございます。

「お呼びいただき、ありがとうございます」
「杉君、これから明治政府のために働いていただきますよ。君や渋沢栄一君のような能力のある人にはどんどん政府のために活躍していただきたいのです」
「早速、お願いがございませう」
「なんでしょう」
「我が国が一等国になるためには、政府が国民のことを把握していなければなりません。その調査を行いたいのでございます」
「それが国のためになるなら、是非やっていただきたい、だが、予算はどのくらいかかるのだろう。出来たばかりの政府で、大きな予算はさげんのだよ」

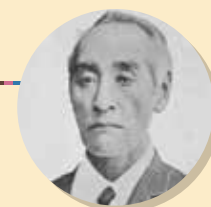


辛未政表
太政官政表課において杉亨二が編成した、わが国最初の総合統計書
明治5年(1872)

日本近代統計の祖

すぎ こうじ
杉 亨二

1828(文政11年)~1917(大正6年)



明治4年(1871)に設置された太政官正院の統計局前身にあたる「政表課」の大主記に任ぜられたことから、「初代・統計局長」といわれる。統計教育の先覚者でもあり、「日本近代統計の祖」と称される。明治12年(1879)、国勢調査の試験調査ともいえる「甲斐国現在人別調」を実施した。

移 智 叟

「統計」という訳語がstatisticsの本来の意味を表現していないと自ら漢字を創作した



「甲斐国現在人別調」結果報告書(明治15年刊行)
甲斐国人口397,416人、調査費用約5760円、調査員約2000人(1人あたり約39軒担当)。費用は、当時諸外国で行われていたセンサス費用の1/2から1/4だったと記録されている

もちろん、日本中の国民の、住所、年齢、職業などこと細かに調べたいのですが、予算もなければ、調査方法も確立していない。そこで杉は、これをまず甲斐国、今の山梨県で実施をいたしました。これが「甲斐国現在人別調」。これを足がかりに、本格的な調査をしよう。政府と山梨県で予算を組みまして、明治12年12月31日に実施されたのでございます。この調査で、全国で調査を実施した際に、一体いくらの予算が必要なのか、それがわかるはずだったのでございます。

杉の尽力をもって、甲斐国での統計調査は実施されたのでございますが、全国の調査は容易ではありません。その理由は、「そんなものに莫大なお金をかけなくても我が国には戸籍というものがあるではないか。江戸の昔のような名主の管理している人別帳や寺の過去帳じゃない。明治政府による国家的な戸籍で、納税や兵役は戸籍に基づいてきちんと行われているんだ。人口調査など必要はない」というもの。

財政難が表面的には常に主な理由でありましたが、それ以上に統計への理解がまだこの頃の日本には十分浸透していないことが大きな理由だったと言えるかもしれません。

道のりはまだまだ遠い

杉は、明治18年、官職を辞し、以後は民間で、統計の専門家の養成を行いました。明治27年、日清戦争。スイスの万国統計協会、ギュイヨームという方から、世界人口センサスへの参加が求められました。「欧米各国と歩調を合わせ、相互に比較可能な形で人口センサスを実施してください」人口センサスとは、人口を数える全数調査、すなわち今という国勢調査のことです。しかし、なかなかことはなされませんでした。実施に向けて運動したのは、杉が設立した東京統計協会や、明治9年に設立された統計学社などの民間団体だったのでございます。国勢調査実施への道のりは、まだまだ遠いのでございます。

第一部

講談

国勢調査の実施まで

欧米諸国二於テハ前世紀ノ
初以来施行スル調査ナリ



いよいよ実施のつもりが…

「国勢調査」という言葉は、国の勢いを調べるのではなく、国の情勢を調べて知ること、“Population Census”の訳なのでございます。「国勢」という言葉を用いて統計の重要性を最初に訴えましたのは、早稲田大学の創設者で、第八代、十七代内閣総理大臣、大隈重信侯であった、と言われております。

明治35年に「国勢調査ニ関スル法律」が定められ、明治38年に第一回国勢調査を行い、世界人口センサスに参加する予定でありました。しかし、その前の年に日露戦争が始まり、莫大な予算が必要な国勢調査どころではなくなりました。

時は移り、大正4年、今度こそ実施されようと思った国勢調査も、第一次世界大戦(日本は大正3年に参戦)で流れてしまいました。



日露戦争時の御前会議
明治37年(1904) 写真提供: ジャパンアーカイブス



丸の内(自動車・自転車・人力車が行き交う)
大正元年(1912) 写真提供: ジャパンアーカイブス



東京・浅草にぎわう興行街
大正2年(1913) 写真提供: ジャパンアーカイブス

法律制定から15年後

大正6年、国勢調査実施のため立ち上がった男がおります。内閣統計局長、牛塚虎太郎。この方が、時の内閣総理大臣、寺内正毅に「国勢調査実施ニ関スル件」の意見書を出しました。

「国勢調査は政治上、経済上からみて、国の根本的調査である。欧米諸国においては、前世紀のはじめより実施されている。この先、欧米諸国と対応してゆくには、国勢調査は必須条件である。しかも、わが国においては、明治35年に国勢調査の実施を法律で定め公言している。それが十年以上たっても実施されていないとは、いかなることであるか」

大正6年7月、牛塚らの尽力により、「国勢調査施行ニ関スル建議案」が衆議院で可決、大正9年の実施が決定し、大正7年度の予算に、国勢調査に関する予算が組み入れられたのでございます。

国勢調査の実施に人生を懸けた杉亨二は、予算案が公表されたその日に息を引き取ったのでございます。



日本初の駅伝競走(農都50周年記念駅伝徒歩競走)
大正6年(1917) 写真提供: ジャパンアーカイブス

我が国初の統計機構を設置

おおくま しげのぶ
大隈 重信

1838(天保9年)~1922(大正11年)



早稲田大学の創立者としても知られる大隈重信は、統計に関心を持ち、その発展に業績を残した。

明治14年(1881)、杉亨二らが明治政府に要望し続けていた統計機構の拡大強化として統計院を設立、初代統計院長に就任する。内閣総理大臣時代には、「統計の進歩改善に関する件」(大正5年内閣訓令第1号)を公布し、全省庁が統計の改善、進歩に努力すべきであることを訓じた。



統計院設置の建議書(明治14年)
「国勢」(国の情勢)という言葉を使い、統計の重要性を訴えている

「現在ノ国勢ヲ一見ニ明瞭ナラシムル者ハ統計ニ若クハ莫シ」
(現在の国の情勢を一目でわかるように明瞭にできるものとして、統計に及ぶものはない)

第1回国勢調査を実施した・原敬

さて少し、時代はさかのぼりますが、杉の設立した東京統計協会の会員の中に、原敬という男がおります。原は、明治18年(1885)に外務省の書記官としてパリの公使館に赴任しました。当時、フランスは「1886年国勢調査」の実施のさなかで、原は、毎年調査するのが良いが多額な費用が必要なこと、調査報告書は詳細で膨大なものであること、人口は種々の行政の基礎であり、5年ごとの調査は直接法律に基づいて実施していること、などの報告を2回にわたり東京統計協会に送っています。このような貴重な経験によって、国勢調査が近代国家の運営に不可欠であるという認識を強くしたことでしょう。

この原敬が、その後、内閣総理大臣として国勢院を設立し、第一回国勢調査を実施したのです。



国勢院
大正9年(1920)~大正11年(1922)

「国勢調査」ってなんだ？

大正7年5月、臨時国勢調査局が開設。国勢調査評議会も設置され、全国で約26万人の調査員が任命されました。

第一回国勢調査は大正9年、1920年10月1日に実施されました。それは、杉亨二が「甲斐国現在人別調」を実施してから40年後、万国統計協会の参加要請から25年後、「国勢調査ニ関スル法律」が定められてから18年後のことでありました。

「おいおい、国勢調査が行われるって新聞に出ていたぞ」
「国勢調査ってなんだ」
「俺もよくは知らないけれどよ。とにかく、これをやれば、日本は一等国の仲間入りをするって話だ」
「それは凄いや。で、一等国ってなんだ？」
「一等賞みたいなもんじゃないか」
「なんかもらえるのかな」
「福引きじゃないよ」

老若男女全国民が調査対象だってんですから、国中の騒ぎになったのでございます。

第一部
国勢調査はじまり物語

第一部
国勢調査はじまり物語



第一部

講談

第一回国勢調査

大正九年十月一日

国を挙げてのお祭り騒ぎ



一等国の仲間入り

第一回国勢調査が行われることは決まった。國中が「一等国の仲間入りだ」ってんで、大騒ぎをしておりましたが、さて、この調査がどういったものなのか、詳しいことまでは全国の国民までは浸透してはなかったのをごさいます。まあ、時はまだ大正時代でございますから、皆、生きるのに必死でございます。国勢調査よりも、今日のご飯のおかずが気になる。今でもそうかもしれません。

ここはひとつ、国勢調査を全国民に宣伝しなくてははいけない。政府もいろいろと考えたのをごさいます。

さて、宣伝すると申しまして、当時はテレビもインターネットもない。ラジオもまだございません。新聞、雑誌といった活字媒体がよろしかろうってんで、まず、分かりやすい標語を募集いたします。

「国勢調査は文明国の鏡」

「一家の為は一国の為になる」

などというストレートな標語から、

「一人の嘘は万人の実を殺す」

「申告は一に正直二に正確」

このような、国勢調査には正直に答えなさい、嘘や秘密はいけません、という諷刺の標語なんかもありました。



国勢調査ポスター

ふりがな付きの文章は役人的でなく、よいと大評判

川柳、都々逸、替え歌

さらには川柳、都々逸、替え歌、そういったもので宣伝をしていったのをごさいます。

「ぬしはわがまま、わたしはきまま、国勢調査はありのまま」

これは都々逸ですね。国勢調査はありのままに答えなさいよ、と言っているわけでございます。当時は、三味線に乗せて、おもしろおかしい文句を綴る都々逸などがたいへんに流行しておりました。

「産声に一人追加を急に書き」

これは川柳です。調査の途中で赤ん坊が産まれて、あわてて書き加えた、微笑ましい様子を描いております。

「お前はでかいズータイの癖に仕事は半人前だ」

「何言ってるんだ、お父つあん、国勢調査じゃ一人前だよ」

こんな小唄も作られました。



第1回国勢調査・徳島市の「新町宣伝隊」が街に繰り出したときの様子 大正9年(1920) 写真提供:立木写真館

変わった話もございました。日本全国調査をするというので、ある山奥の村まで調査員が出掛けて行きますと、山の中で田んぼをつくるような平らな土地もない、世の中から隠れ住んでいる村で、稗をこしらえて細々暮らしている。ここは何かと尋ねたら、なんと平家の子孫の村でしてね。村人が言いました。

「源氏は今、どうしていますか」

嘘のようなホントのような話……、平家の話はともかく、各地の山中でそれまで知られていなかった集落が発見されたというのは事実のようでございます。

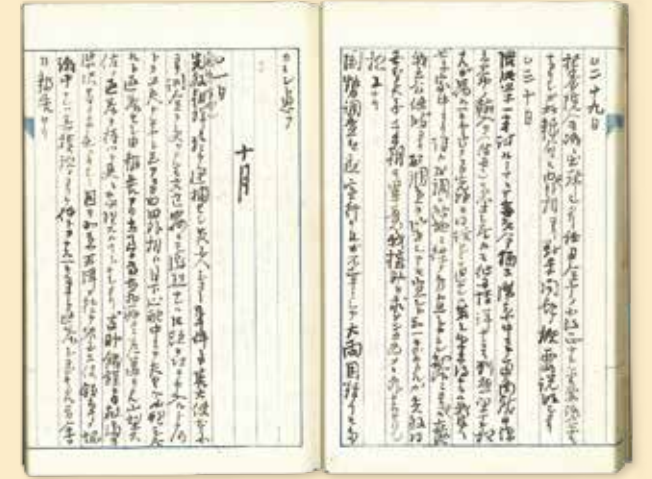
時の内閣総理大臣

原敬

1856(安政3年)~1921(大正10年)



パリ公使館勤務時に「1886年人口センサス」をまのあたりにし、「人民の数が租税や行政の種々の法律を実施すべき基礎となることから、国勢調査は直接に立法上に関係を有する」と認識。大正7年(1918)に総理大臣に就任し、平民宰相として人気を博す。大正9年5月に国勢院(臨時国勢調査局も管理)を設置、初の全国的な国勢調査を実施する。実施の翌年11月、東京駅で暴漢に襲われ、国勢調査の結果を見ることなく永眠した。



原敬の日記(大正9年9月30日)

第1回国勢調査前夜の日記。大雨を案じる記述が残されている

また、こんなこともございました。

当時は、ふだん住んでいる場所で調査する現在の方法と異なり、10月1日午前零時にいた場所で調べました。ですから、この時間にどこにいたのが重要なわけで。旅行にも行けななきゃ、お酒を飲みにも行かれない。この日は料理屋さんも夕方には店閉めちゃって、繁華街から人っ子一人いなくなったのです。

まず無難におこなわれたるなり

時の内閣総理大臣、原敬は政界の裏表を伝える膨大な日記を残しております。パリ公使館勤務時の経験から国勢調査の重要性を強く認識していた原は、この日記にも第一回国勢調査のことを書き残しておりました。「国勢調査今夜実行なるが不幸にして大雨、困難事も多からんと思う」。

国勢調査の日は大雨でした。台風で関東・東北地方は水害にもみまわれておりましたから、原首相も心配なさっていたのをごさいます。

そして終了の後は

「評議員を午餐に招き慰勞をなしたり。初めての試みとしてはまず無難におこなわれたるなり」。

第一回国勢調査は無事に行われたことが、記されているのをごさいます。



第1回国勢調査・質問に答える水上生活者の一家 大正9年(1920) 写真提供:朝日新聞社

さまざまな困難はあったものの、国勢調査は実施されました。成功の大きな要因は、国民が「日本が一等国」になったことを象徴する調査であると捉えたこと、調査に参加することを誇りに思ったことにあると思われまます。

大正9年の国勢調査は第一次世界大戦後の我が国の現状を把握し、政策に有益な基礎資料となりました。

こうしてはじまりました国勢調査、大正、昭和、平成を経て、そして令和と、百年の歴史を積み重ねていくのをごさいます。

第一部 国勢調査はじまり物語

第一部 国勢調査はじまり物語



唱歌が語る、国勢調査のいろは

本邦初の人口センサス実施に向け、広報の一環として作られた「唱歌」。調査の趣旨や意義だけでなく、調査票の記入方法、当日の心得まで、1～10番までの歌詞にみごとに盛り込まれています。



『国勢調査宣伝歌謡集』(臨時国勢調査局・大正9年9月発行)

第1回国勢調査の広報の一環として、国、地方あげて募集された「宣伝歌謡」の一部を集めたもの。唱歌、数え歌、和歌、標語、川柳、都々逸、一口噺から新庄節、安来節、サノサ節など民謡の数々、または「センサス節」まであり、当時の様子がよくわかる1冊。本書は、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている。



国勢調査唱歌

1 国勢調査の目的は**帝国版図**の人々の世帯の状態を精査して善政の基となすにあり
実にや建国以来の国民一致の事業なり

2 調査の時は何時なるぞ今年**十月一日**の午前零時の真夜中に我家に居合はす其の人を洩れなく用紙に書入れて午前八時に出すなり

3 世帯の種類にニツあり宿屋下宿屋合宿所是等は総べて准世帯其他は**普通の世帯**なり
准世帯では管理者を申告義務者と定めらる

4 調査の事務を掌る其の役の名は**調査員**
用紙の配付や取り集め其骨折や如何ならん胸に下げたる徽章には重き役目を示すなり

5 申告事項は姓名に世帯の主人と続柄世帯に於ける地位や又男女の区別を明かに
生れし地名と誕生日妻や夫の有る無しも

6 日々に営む生活の業務の書き分け注意せよ一ツの職を持てる人数の業務を兼ねる人
分けて記せよ**本業と副業**中の主なもの

7 農にも自作と小作あり商にも卸や小売あり製造販売兼ねるもの一目でわかる様にせよ
職業上の地位により業主と従業員

8 調査する日の近づかば成たけ**旅行**をせぬものぞ火の元用心第一に**伝染病**にも気をつけよ
是等の禍起りなば調査の妨げ如何計り

9 課税にかかはる調かと疑ふ虞れ更に無し万**一**申告せぬ人や不実の申告せし人は
重き罪科に処せられて末代までも家の恥

10 十年一度の此調査能く其のわけを会得して人皆心を一となし外つ国までも我が国の力の程をあらはして国の誉を輝かせ

帝国版図って?

帝国版図とは、当時日本の行政権が及んでいた内地、朝鮮、台湾、樺太のこと。

調査日はなぜ10月1日?

「冬は積雪が深く」「夏は炎熱が激しく」「春は旅行遊山するもの多く」と秋季に絞られ、「比較的人口の分布が常態であり、全人口の大半を占める農業従事者にとってはかならずしも農繁期でなく、かつ1年の4分の3を経過した10月1日をもって、最も適当な調査の期日と決めたと第1回報告書にある。今日まで全国一斉に行うこの調査日だけは変わっていない。

旅行中だと「宿屋の准世帯員」!

「普通世帯/准(準)世帯」の区分は、区分定義の変更はあるものの、第13回調査(昭和55年)まで使われた。第1回当時は現在地方式(10月1日午前0時時点の居場所を把握する)だったため、10月1日午前0時を以て旅行中の人は「宿屋」の世帯員としてカウントされた。現在の世帯区分は「一般世帯/施設等の世帯」。

第1回調査員は名誉職

当時は「文字を解し、事理に通じ、名望ある者」という選考要件のもと、小学校教員、青年会幹事、町内会役員など約26万人が栄える第1回調査員に任命された。現在の国勢調査員は総務大臣が任命する非常勤の国家公務員。第20回調査(平成27年)では約70万人が従事した。



第1回調査員に贈られた記念章

調査事項は8項目

第1回の調査事項は8項目とシンプル。その後、時代の要請により項目数は変化し、令和2年の調査は大規模調査に当たり19項目を予定している。当時は出生地も調査事項だったが、第7回調査(昭和25年)を最後に、以降調査事項から除かれた。

職業記入心得

職業についての歌詞は2番に分かれ、懇切丁寧でわかりやすい。当時は、農家の副業を奨励する政策の影響か、「本業」「副業」の2欄が存在した。副業調査は第1回と第3回のみ。

調査日は在宅で

ふだん住んでいる場所とらえる「常住地」方式が取り入れられたのは昭和25年。それ以前は「現在地」方式だったため、10月1日の調査日は在宅が厳守でもちろん火災・伝染病はもつてのほか。

こくぜい調査??

「国ぜい調査って又出すほうですか?」「国勢と国税は似て非なるもの。出すものが違います。世帯のありのままを書き出すのです」『宣伝歌謡集』にはこんな一口噺も掲載されている。

国の誉れを輝かせ

明治35年の「国勢調査ニ関スル法律」で国勢調査は10年ごとに行うと制定されていたが、大正11年の改正で中間年に簡易な国勢調査を行う規定がもうけられ、以後100年、20回に及ぶ歴史が始まる。

第1回国勢調査 あれこれ

全国5,596万人の数と属性を調べ上げた第1回国勢調査。
現在でいう調査票「国勢調査申告書」にもさまざまな工夫が見られます。
製表要員は141万人、報告書刊行まで9年1か月要した大調査だったのです。



「国勢」とはどんな意味？

明治14年(1881)「国勢」という言葉を使い、統計の重要性を訴え、統計院を設立したのは大隈重信でした(p.5参照)。「国勢」という「国のいきおい」ととられがちですが、明治29年(1896)に衆議院と貴族院で決議された「国勢調査ニ関スル建議」には「全国ノ情勢」と書かれています。

国勢調査ハ全国人民ノ現状即チ
男女年齢職業(中略)家別人別ニ就キ
精細ニ現実ノ状況ヲ調査スルモノニシテ
一たび此ノ調査ヲ行フトキハ
全国ノ情勢 之ヲ掌上ニ見ルヲ得ベシ
～ 明治29年「国勢調査ニ関スル建議」より

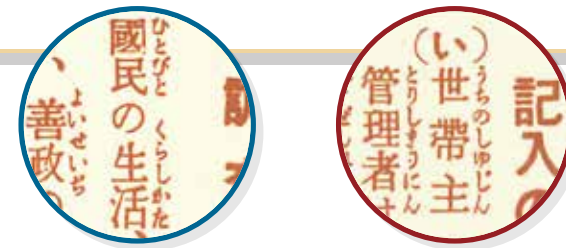
「国勢調査」の名前はいつできた？

「国勢調査」は、英語の“Population Census”(人口センサス)の訳語として用いられています。「センサス」とは調査対象をすべて調べる調査を指し、「全数調査」とも呼ばれています。
当初は、「民口調査」などいろいろな訳語があったようですが、「国勢調査」という言葉が公式に使用されたのは明治29年(1896)の建議案の中で、その後、明治35年(1902)12月「国勢調査ニ関スル法律」が成立し、「国勢調査」として定着することになりました。

人口取調之法	明治6年	杉亨二 建議書中
人口ノ大検査	明治7年	津田真道 訳書中
現在人別調	明治12年	甲斐国現在人別調
戸口調査	明治19年	原敬 書中
民口調査	明治22年	吳文聡 訳書中
国勢大調査(又は国勢調査)	明治26年	白井喜之作 学会誌論文中
民勢大調査	明治29年	渡辺洪基ほか 請願書中
国勢調査	明治29年	衆議院及び貴族院 建議案中

調査票は「親切設計」

我が国初の国勢調査申告書。A3判両面刷りの世帯票で10名分の記入ができます。上部には国勢調査の目的に加え、「記入の範囲」「記入の注意」、各欄にもいいねいな記入心得が書かれており、わかりやすくするための工夫が散見されます。ふりがなは漢字の読みではなく、「國民=ひとびと」「生活=くらしかた」「世帯主=うちのしゅじん」など、明治以降につくられた熟語など当時なじみのない言葉を一般住民が理解できるように言い換えています。



「戸籍人口」とどれだけ差があった？

国勢調査の実施が、杉亨二など統計先駆者の努力にもかかわらず、遅れていたのは「戸籍」の存在も一因でした。戸籍から人口がわかるのではないかと。実際、明治5年(1872)以来、我が国では戸籍を使って人口の統計が作成されていました。しかし、届出の間違いなどがあり、正確な人口をとらえるという点では大きな問題がありました。
また、戸籍を基に推計した人口には年齢、続柄や職業別などの統計がなく、人口構造や世帯の実態を明らかにするという点では不十分だったといえます。その点、国勢調査は対象を直接調査し、対象の属性を組み合わせて集計するという近代統計調査として、新しい時代を切り拓くことができたのです。

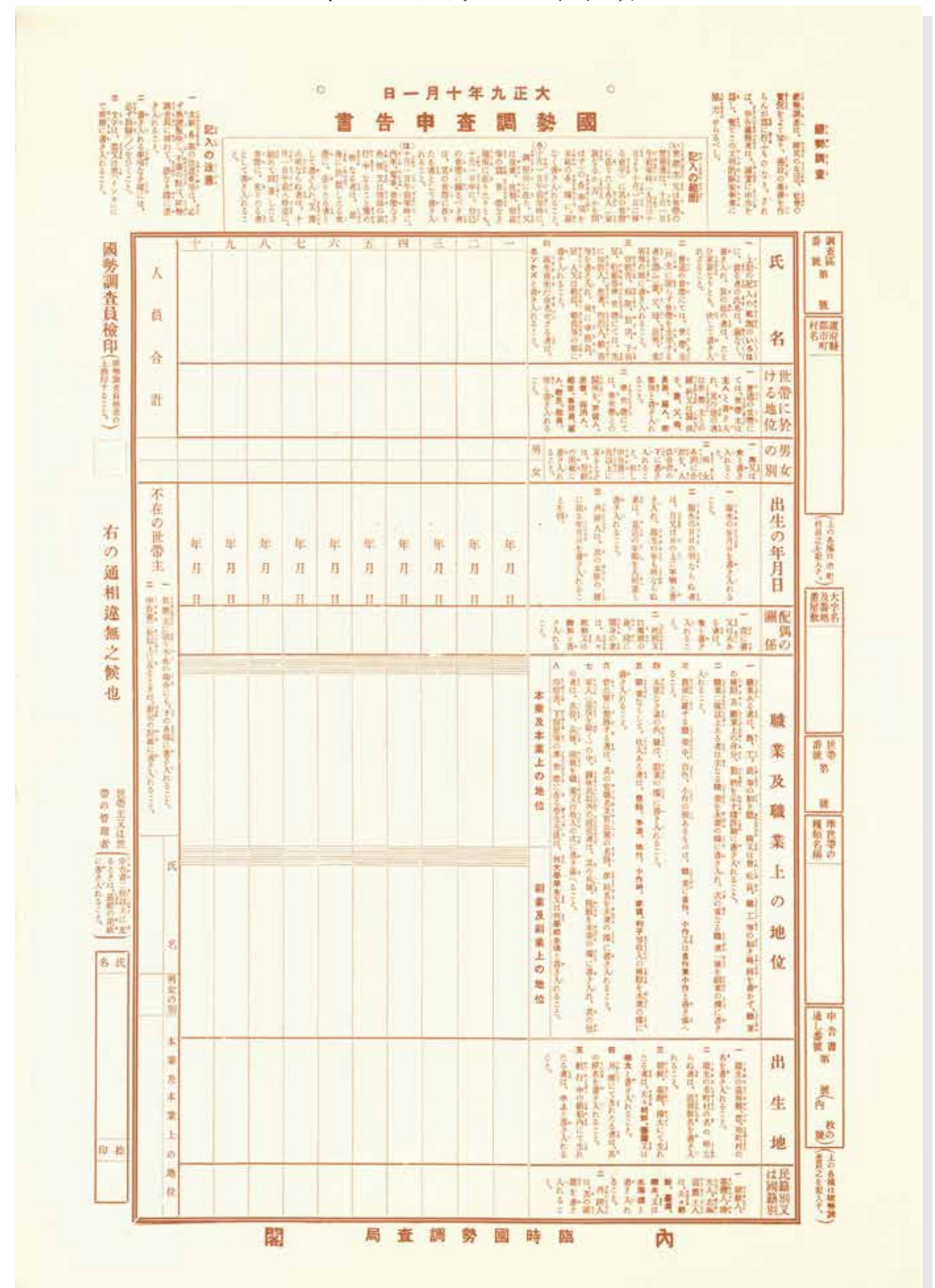
大正9年(1920)

戸籍人口(年末)	国勢調査人口(10/1現在)
5,792万人	5,596万人

196万人多かった

近代統計調査を国民に初めて浸透させ、他の統計調査への波及効果をもたらしたという点で第1回国勢調査は大きな意義をもっていたといえます。

第1回国勢調査申告書



59%縮小、実物はA3判両面刷り。統計資料館で閲覧できる。